

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-12 キーワード (Ja): NDC8:371.6, 教育学. 教育思想, NDC8:161.3, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」・第2グループ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001574

はしがき

井上順孝

本報告書は、2009年9月20日に開催された国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」における議論をまとめたものである。このフォーラムは、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者・星野英紀大正大学教授）・第2グループの研究分担者・連携研究者が中心になって、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所のプロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」との共催によって行なわれたものである。

発題者として、国外からもこのテーマに関心を抱いている3人を招聘したが、とくにワトキンス氏は、映画を宗教学の講義にどのように用いることができるかについて、すでに編著も記している。丸一日を費やしての議論は非常に実り多いものであり、宗教文化教育を実質的に推進する上で、基本的な視点を数多く提起している。議論の一部は2009年11月に、衛星放送番組（「精神文化の時間」）として、一時間にわたり放映された。ほぼ6時間にわたる議論を1時間に編集したいわばダイジェスト版である。

だがフォーラムの内容は具体的で実践的であったので、すべての議論を今後の研究に共有することが好ましいと考え、報告書として刊行することとした。刊行に当たっては、発題者、レスポネントには若干の加筆をお願いしたが、できるかぎり、議論を忠実に再現したいと考え、なるべく修正は控えてもらった。討議部分のうち、フロアとのやりとりについては、編集者の責任で若干文体を整えた。当人の加筆を経ていない人については、氏名は記さず、「質問者A、質問者B、・・・」という形にした。

フォーラムでは、いくつかの重要なポイントが提起された。主なものに簡単に触れておくと、1つは映画を学生に見せるときの注意点である。たとえば、中東を舞台にするような映画には、イスラームとキリスト教が絡まるものが数多くある。同じ歴史的内容を扱っていても、どの宗教文化の視点から制作されたものであるかによって、映画の内容や構成が大きく異なる場合がある。そのようなときには、教師の側にその背景について、ある程度の知識が求められることがあるのではないか、ということになる。

この点は、学生は宗教文化についてほとんど知識がない場合が多いので、メディアリテラシーということも考慮しなければならないのでは、という議論に展開した。一般的には忠実に現象を描写していると思われがちなドキュメンタリー作品ほど、その注意が必要になる。あるいは、映画が虚として制作されても、観る側に実として受けとめてしまう人もいる。さらには虚と実が交錯する映画がある。監督がどのような素性の人であるかを知ると、映画の見方が変わることも指摘された。ある場面が何を意味するか、隠されたメッセ

ージは何かを知ると、映画の受けとめかたも大きく異なる可能性があるからである。

宗教についてほとんど知識のない学生が、宗教文化についての間違った理解を増幅させてしまうというおそれについても議論された。しかし、これに対しては、教師があまりインストラクションを与えるより、学生それぞれの受け止め方、理解の仕方に任せ、かりに問題の多い映画であっても、そうしたものに対する判断力を、一人ひとりが養えばいいという考え方も提示された。学生を自立した人間として扱うべきということになる。フランスのように教育において個性を重視する国では、教師の過剰なインストラクションは、かえって不適切ということになるようである。

一見宗教映画とは思えない映画でも、外国人の目からすると、その国の宗教文化を理解する上で非常に役立つ映画がある。こうした場合は、研究者同士の国を超えた情報の交換が有用になるという意見が出された。情報時代における教師側の情報交換である。アメリカでは、映画を宗教学の教材に積極的に取りこむ試みも始まっている。

今回の発題者が住む国は3つにわたっていたが、それぞれの国の社会的、文化的背景が異なれば、映画を宗教文化教育の教材にするときの課題も、異なる面があると分かる。その一方で、グローバル化が進行する現代においては、若い世代の感覚は、文化ごとの違いが、これまでほど目立たなくなっている。その意味では教師の側の情報交換は、より大きな意味をもってくる。このフォーラムを契機にそうした交流が深まることを願いたい。

最後に本フォーラムの開催日時、開催場所、発題者・レスポデント・司会者、及びフォーラムの実施に関わった2つのプロジェクトのメンバーを記しておく。これらの方々、そして当日熱心に議論に加わっていただいた参加者全員に感謝の言葉を述べたい。

◆開催日時等

- ・開催日時 2009年9月20日(日) 10:00~17:30
- ・開催場所 國學院大學・学術メディアセンター1階・常磐松ホール
- ・発題者 近藤光博(日本女子大学)、中町信孝(甲南大学)、
Jean-Michel Butel (仏、INALCO)、Jolyon Thomas (プリンストン大学)、
Gregory Watkins (スタンフォード大学)
- ・レスポデント 臼杵陽(日本女子大学)、櫻井義秀(北海道大学)、富澤かな(東京大学)、
西村明(鹿児島大学)、山中弘(筑波大学)
- ・司会者 井上順孝(國學院大學)

◆実施メンバー

- ・科研第2グループ: 井上順孝(幹事)、黒崎浩行、平藤喜久子、星野靖二
(いずれも日本文化研究所プロジェクトメンバーでもある)
- ・日本文化研究所プロジェクト: ノーマン・ヘイヴンズ、市田雅崇、李和珍、小堀馨子